

橋爪大三郎さんの
(社会学者)

ポケット
から

「赤頭巾ちゃん」は、ふつと結末が違う。赤頭巾が、おばあさんに なりすましたオオカミに「何て大きな歯 をしてあるの」と聞くと、「おまえを食 べるために」とさりと食べられてし まって、おしまい。狼師が助けに来たり なんかしない。グリム童話より百年古の から、元の民話に忠実なのだ。こうでな ければ、小さい女の子がふらふら誘拐犯 について行ってしまいかもれない。

「ペロー版『眠りの森の美女』には続き があった、めでたく結婚した王子様の母 親が美は人食い。「青ひげ」は、新妻を

つぎつぎ殺してしまふ殺人鬼。「子ども 向き」にオブラートで包むのでなく、人 間の隠れた欲望や異常さからも目をそむ けないのが、ほんとうの童話だろう。

「黒蜥蜴」は、江戸川乱歩の手になる 大人のための童話。女傑の盗賊・黒蜥蜴 が名探偵・明智小五郎にかなわぬ恋をす る。三島由紀夫が戯曲に書き直し、美輪 明宏が演じて有名になった。明智に追い 詰められた黒蜥蜴は、これまでと毒をあ

カジュアル読書



橋爪大三郎さんの
(社会学者)

ポケット
から

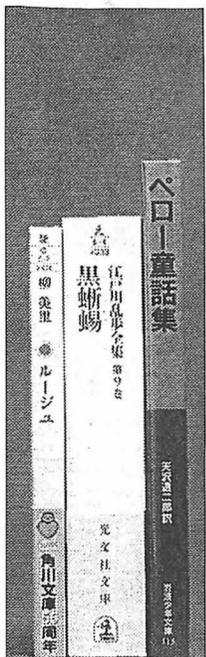
じり貧でん詰まりの日本を救えーと、 異能の大臣・織田信介率いる、改革派官 僚チームが起ちあがった。主人公の産業 情報省調査課長・木下和夫をはじめ、明 智、前田、柴田、石田…の面々。対する 守旧派の大物政治家が、三好、松永、武 田、上杉、朝倉と並べば、まるで大閥記 みたいな近未来小説だ。

平成三十年の日本は、ひどいことにな っている。少子高齢化、産業の空洞化が 進み、二〇年以上続くゼロ成長で失業も 慢性化。田の価値も下落して、一人当た りGDPはシンガポール、台湾にも追いつ

抜かれた。そこで織田大臣が掲げるのは 《法令十年サンセット制、公務員の任期 十年》や、《医療、土地流通、建築、農 耕、教育》の自由化、《国税、歳出、公 務員数》の半減など、政府部門の大胆な 縮小プランだ。

馬遼太郎氏は、△二十三歳だった私に對 して手紙を書きつけてきました。日本と はこういう国であったと。これが私の小 説ですね」と言う。軍隊という官僚機構 が硬直化し暴走して、国を滅ぼし、大勢 の人びとを死なせた。その痛恨が、司馬 氏の描くさうさうとした英雄群像の裏面 にあることを、忘れてはいけない。

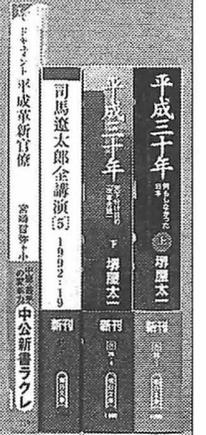
カジュアル読書



シャルル・ペロー「著」ペロー童話集 (天沢退二郎訳、岩波少年文庫・600円)
江戸川乱歩「著」黒蜥蜴 江戸川乱歩全集第9巻 (光文社文庫・933円)
柳美里「著」ルージユ(角川文庫・470円)

これがほんとの童話ってものだ

「あはし、あなたの腕に抱かれて いますのね。……嬉しいわ。……あた し、こんな仕合せな死に方が出来ようと は、想像もしていませんでしたわ」
現代の王子様は、里彩を幸せにできな い。中年のバツイチ男・秋葉。嘘くさい 業界に嫌気がさしているゲイのアーティスト レクター黒川。通俗な人物たちだが、 現在の地名やタレントの固有名詞がちり ばめられると、まるでこの世界そのもの とも思えてくる。そんななかで、里彩の ようにインセントでありうること。これ が究極の理想、童話でなくて何だろう。



馬遼太郎「著」平成三十年 上・下 (朝日文庫・各680円)
司馬遼太郎「著」司馬遼太郎全講演【5】 (朝日文庫・6600円)
宮崎哲弥・小野展克「著」ドキュメント 平成革新官僚 (中公新書ラクレ・7600円)

では現代の官僚たちは、すぐさま大胆 改革をやる気があるのか。『平成革新官 僚』は、金融庁以下七省庁を取材する。 そこそこ有能なアイデアマンはいるよう だ。でも、信介に反対する官僚のほうが 多かった。このままだったら平成三十年 を迎えても不思議はない。そもそもこれ ら省庁のうち、本当に必要なのは、どれ ぞれか。明治維新で、武士は全員お私 い箱になった。それに劣らぬ大鎧が必要 になってきた。

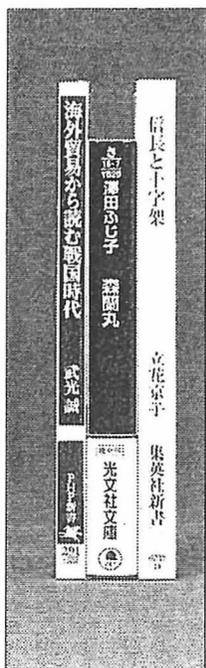
橋爪大三郎さんの
(社会学者)

ポケットから

信長は、戦国日本のうんだ天才だ。築市楽座を断行、鉄砲隊で武田の騎馬隊を壊滅させ、比叡山を焼き討ちし、全国統一のルールを敷いた。秀吉や家康はその上を走っただけである。

この偉業は、信長の常識外れな個性によるものとされてきた。だが立花氏は、大胆きわまる仮説を提示する。

信長のブレンには、清原枝賢(天下布武の印を考案した)や細川藤孝といったキリシタン人脈があり、その黒幕はイエズス会だった。イエズス会は日本を足場に、中国への布教を目論んでいた。そ



立花京子「著」信長と十字架「天下布武」の真実を追う
(集英社新書・740円)

澤田ふじ子「著」森蘭丸(光文社文庫・620円)

武光誠「著」海外貿易から読む戦国時代
(PHP新書・720円)

日本史の常識に反旗 大胆な仮説

書き換えなければならない。

立花氏はこの大胆な仮説を、細心に検証していく。「天下布武」の典故や、それを信長に説いた人物は誰か。將軍家や朝廷を陰で動かすキリシタン人脈。イエ

すべ、「中国大返し」ができたのか。キリスト教の枠をはみ出して自分を神格化しようとした信長を、イエズス会が見限り、光秀に主君を殺させ、その光秀を秀吉が討つように仕組んだのだと、立花氏は推測する。たしかに、そう考えれば全てのつじつまが合う。

一九三三年生まれの立花氏は、朝日カルチャーセンターの古文書講座に通い、独学で戦国史を研究。この十年ほどのあいだに続々と論文を発表し、学界に衝撃を与えた。着眼や推論の組み立てが鋭く、専門外の私にも説得力がある。

見慣れた信長が、世界史の同時代に敏感に反応した強烈な人物像として、活き活きとよみがえった。世界スケールの日本人を描く傑作である。

澤田氏、武光氏の近著も、同じこの時代を新たな視点で描いていて興味深い。

カジュアル読書



橋爪大三郎さん(社会学者)の

ポケットから

月給一万五千円。

自衛隊の初任給、だったそう。

高度成長期、働き口ならいくらでもあった。▲給料は法外に安く、環境はこうえなく劣悪で、仕事は危険きわまりなく、おまけにその国の軍隊とはちがって、名譽も誇りもない。チンピラだったの不器用だったり借金があったり、わけありの若者だろうとかき集められた。

そんな一人だった浅田次郎氏の、実体験にもとづく短編集が『歩兵の本領』である。やたら新入隊員を殴りつける、古参士長(旧軍でいえば上等兵)の暴力に

ます庄倒される。だが読み進むにつれ、自衛隊に戦後社会の哀しい構造が凝縮されているように、厳肅な気持ちになる。

よくある人物と筋書きの組み合わせでほろりさせ、演歌のような手なれた

自衛隊・憲法・平和ってなんだらう？

筆致が浅田氏の持ち味だ。しかし今回は、自分の原点をさらしている。当時の深い傷口からためどなく、血がにじんでくる。そのかさぶたをはがしては、作品にし続けているのではないか。

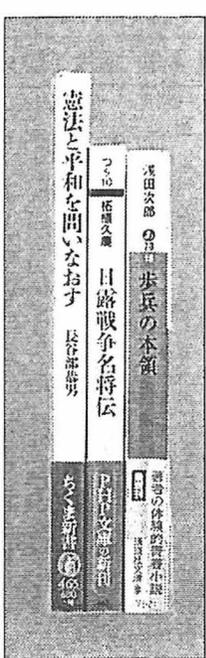
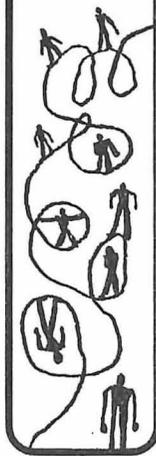
『日露戦争名将伝』は、大山巖、兒玉源太郎ら日本と、ロシアの將軍たちを紹介する。名將を集めた第一部、愚將凡將を集めた第二部と評価が明確なのがよい。

この將軍たちの指揮の下、数十万の兵

「憲法と平和を問いなおす」は、平凡な書名に似合わず、本格的でスリリングな政治哲学の書。日本国憲法を支えるふたつの原理、民主主義と立憲主義とは、互いに矛盾する場合もあるとする。さらに、《憲法第九条の文言自体からは、集団的自衛権が否定されているという解釈は、一義的には出てこない》《憲法第九条が準則でなく、原理を示しているにすぎないのであれば、自衛のための最低限の実力を保持するために、この条文を改正することが必要だとはいえない》などと、大胆な議論を続ける。

《多様な価値観の公正な共存を目指》として、国家権力に制限を加える立憲主義の主張が、本書の柱だ。立憲主義に立つ限り、絶対平和主義には立てないとも指摘する。憲法と自衛隊を考えるのに、タミングのよい一冊だ。

カジュアル読書



浅田次郎「著」歩兵の本領 (講談社文庫・600円)

柘植久慶「著」日露戦争名将伝 (PHP文庫・580円)

長谷部恭男「著」憲法と平和を問いなおす (ちくま新書・714円)

ポケットから

物質は何でできてきているのだろうか？物質はみな、原子でできている。原子は、素粒子でできている。素粒子は、クオークでできている。そのクオークが、「超ひも」でできているのだという。そこでさっさと、「超ひも理論とは何か」を読んでみた。十分の一も理解できたか、実はあやしい。でも、未知の世界の扉が開きかけたようで、わくわく興奮した。大事なところを、私なりにまとめてみよう。

この世界には、四つの力が存在する。強い力(クオークの間に働いて、陽子と

カジユアル読書



小説家の長江古義人は妻の千穂、息子のアカリと三人暮らした。その妻の兄で、高校以来の友人・楠吾良が突然、自殺する。映画監督だった吾良は古義人に、沢山のカセットテープを届けていた。そのテープを聴き、死んだ吾良と対話して、松山での忘れられない事件を思い出すのが『取り替え子』のあらすじだ。

大江健三郎と義兄の伊丹十三を取り巻く、実在の人びとそのままである。自信めいたこの小説を、どう読むべきか。加藤典洋の近著『テキストから遠く離れて』(講談社)はこれを、作者/作品

を分離するテキスト論の約束を逸脱する、ルール破りの作品だとする。『仮面の告白』と似ているともいう。『仮面の告白』は、完璧な自信に見えるが、主人公が大蔵省を辞め、小説家になる部分から伏されている。その結果、実在の平岡公威が死に、三島由紀夫という仮面の作家が生き始める物語になったという。

この分析を参考にすると、『取り替え子』は、古義人が最後に『取り替え子』

「よかった」の繰り返し。カップの熱湯に浮かぶ、粉末ココアの塊を想った。こらえるとき、あつけない水面下に没していく。そんな危うさや恐れをまったく話題にしないことが、この小説を成り立たせる虚構なのだろう。

「よくの私小説擁護は…私小説をぼくたちの文学の本道たらしめた…必然性を強調したいのにすぎぬ」(『私小説的現実について』『福田恆存文芸論集』)。

加藤は『取り替え子』の山場、松山での「事件」(同性愛の気配がある)がいまいち、重大な何かで隠されたままだと読む。私は、吾良と古義人の親密な関係こそ架空のもので、あちら側に行った美しい吾良の代わりに「取り替え」られ残される、「醜い」古義人の当惑とわけのない悔恨が、ヒューマンイズムの外見で飾られた小説なのでは、と読んだ。

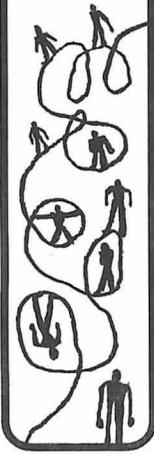
現実そっくり小説のカラクリ

- 大江健三郎「著」『取り替え子』(講談社文庫・650円)
- 庄野潤三「著」『ピアノの音』(講談社文芸文庫・1418円)
- 福田恆存「著」『福田恆存文芸論集』(坪内祐三編) (講談社文芸文庫・1470円)

「なぜ「ひも」か」と言うと、点のように長さがゼロでは、計算に不合理を生じるから。そのひもが、一〇次元の世界を飛び回っていて、「超ひも」と呼ばれる。もちろんこんなひもを、誰も見たわけでもない。でもこのひもから、クオークもブラックホールも、この宇宙全体ができていると考えると、すべて「ひも」が合うのだという。

いちばん面白いと思ったのは、この宇

カジユアル読書



物質は何でできてきているのだろうか？物質はみな、原子でできている。原子は、素粒子でできている。素粒子は、クオークでできている。そのクオークが、「超ひも」でできているのだという。そこでさっさと、「超ひも理論とは何か」を読んでみた。十分の一も理解できたか、実はあやしい。でも、未知の世界の扉が開きかけたようで、わくわく興奮した。大事なところを、私なりにまとめてみよう。

この世界には、四つの力が存在する。強い力(クオークの間に働いて、陽子と

中性子をくっつける)、電磁力、弱い力(ニュートリノに関係がある)、重力。これらが組み合わさって、あらゆる物理現象が起きている。これらの力は、重力はインシユタインの一般相対性理論、電磁力はマクスウエルの理論という具合に、ばらばらに扱われてきた。四つをまとめた説明は、まだ完成していない。超ひも理論はこれに答える「究極の統一理論」なのだ。

「超ひも理論とは何か」と、「応用物理の最前線」は、ぐんとわかりやすい。カーボンナノチューブなど、ハイテク技術が手際よく紹介してある。

『自分で調べる技術』は、引用文献の掲げかた「社会学評論スタイルガイド」が紹介してあって役に立つ。

超ひも理論をくわべると、『応用物理の最前線』は、ぐんとわかりやすい。カーボンナノチューブなど、ハイテク技術が手際よく紹介してある。

『自分で調べる技術』は、引用文献の掲げかた「社会学評論スタイルガイド」が紹介してあって役に立つ。

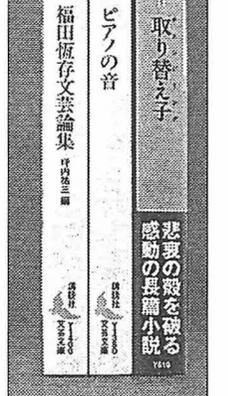
未知の世界の扉を開く「へえ？」の本

- 竹内薫「著」『超ひも理論とはなにか』(講談社ブルーバックス・9807円)
- 早稲田大学理工学部応用物理学科「著」『応用物理の最前線』(講談社ブルーバックス・945円)
- 宮内泰介「著」『自分で調べる技術』(岩波アクティブ新書・777円)

宙が、一〇次元の空間に浮かぶ三次元の板のようなものだという説明。その板に貼りついたまま動き回る開いたひもが、クオークである。ほかに閉じたひも(重力子)があつて、三次元の宇宙を突き抜け、一〇次元の空間を自由に飛び回っている。質量があるのに目に見えない「ダークマター」の正体がこれだという。

超ひもの実在は、まだ証明できない。小さすぎて、考えることしかできない超ひもが、この宇宙を支えているのだと思ってみるだけで愉快ではないか。

ポケットから



物質は何でできてきているのだろうか？物質はみな、原子でできている。原子は、素粒子でできている。素粒子は、クオークでできている。そのクオークが、「超ひも」でできているのだという。そこでさっさと、「超ひも理論とは何か」を読んでみた。十分の一も理解できたか、実はあやしい。でも、未知の世界の扉が開きかけたようで、わくわく興奮した。大事なところを、私なりにまとめてみよう。

この世界には、四つの力が存在する。強い力(クオークの間に働いて、陽子と

を分離するテキスト論の約束を逸脱する、ルール破りの作品だとする。『仮面の告白』と似ているともいう。『仮面の告白』は、完璧な自信に見えるが、主人公が大蔵省を辞め、小説家になる部分から伏されている。その結果、実在の平岡公威が死に、三島由紀夫という仮面の作家が生き始める物語になったという。

この分析を参考にすると、『取り替え子』は、古義人が最後に『取り替え子』

「よかった」の繰り返し。カップの熱湯に浮かぶ、粉末ココアの塊を想った。こらえるとき、あつけない水面下に没していく。そんな危うさや恐れをまったく話題にしないことが、この小説を成り立たせる虚構なのだろう。

「よくの私小説擁護は…私小説をぼくたちの文学の本道たらしめた…必然性を強調したいのにすぎぬ」(『私小説的現実について』『福田恆存文芸論集』)。

加藤は『取り替え子』の山場、松山での「事件」(同性愛の気配がある)がいまいち、重大な何かで隠されたままだと読む。私は、吾良と古義人の親密な関係こそ架空のもので、あちら側に行った美しい吾良の代わりに「取り替え」られ残される、「醜い」古義人の当惑とわけのない悔恨が、ヒューマンイズムの外見で飾られた小説なのでは、と読んだ。

ポケットから

物質は何でできてきているのだろうか？物質はみな、原子でできている。原子は、素粒子でできている。素粒子は、クオークでできている。そのクオークが、「超ひも」でできているのだという。そこでさっさと、「超ひも理論とは何か」を読んでみた。十分の一も理解できたか、実はあやしい。でも、未知の世界の扉が開きかけたようで、わくわく興奮した。大事なところを、私なりにまとめてみよう。

この世界には、四つの力が存在する。強い力(クオークの間に働いて、陽子と

中性子をくっつける)、電磁力、弱い力(ニュートリノに関係がある)、重力。これらが組み合わさって、あらゆる物理現象が起きている。これらの力は、重力はインシユタインの一般相対性理論、電磁力はマクスウエルの理論という具合に、ばらばらに扱われてきた。四つをまとめた説明は、まだ完成していない。超ひも理論はこれに答える「究極の統一理論」なのだ。

「なぜ「ひも」か」と言うと、点のように長さがゼロでは、計算に不合理を生じるから。そのひもが、一〇次元の世界を飛び回っていて、「超ひも」と呼ばれる。もちろんこんなひもを、誰も見たわけでもない。でもこのひもから、クオークもブラックホールも、この宇宙全体ができていると考えると、すべて「ひも」が合うのだという。

いちばん面白いと思ったのは、この宇

超ひも理論をくわべると、『応用物理の最前線』は、ぐんとわかりやすい。カーボンナノチューブなど、ハイテク技術が手際よく紹介してある。

『自分で調べる技術』は、引用文献の掲げかた「社会学評論スタイルガイド」が紹介してあって役に立つ。

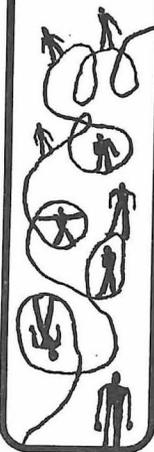
- 竹内薫「著」『超ひも理論とはなにか』(講談社ブルーバックス・9807円)
- 早稲田大学理工学部応用物理学科「著」『応用物理の最前線』(講談社ブルーバックス・945円)
- 宮内泰介「著」『自分で調べる技術』(岩波アクティブ新書・777円)

宙が、一〇次元の空間に浮かぶ三次元の板のようなものだという説明。その板に貼りついたまま動き回る開いたひもが、クオークである。ほかに閉じたひも(重力子)があつて、三次元の宇宙を突き抜け、一〇次元の空間を自由に飛び回っている。質量があるのに目に見えない「ダークマター」の正体がこれだという。

超ひもの実在は、まだ証明できない。小さすぎて、考えることしかできない超ひもが、この宇宙を支えているのだと思ってみるだけで愉快ではないか。

ポケットから

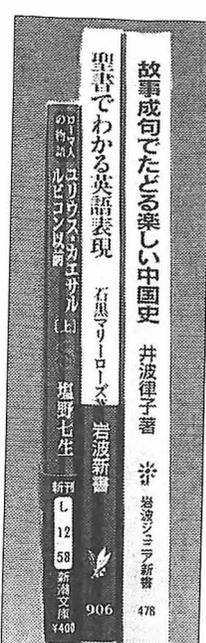
カジュアル読書



北京を、半年ぶりに訪れた。環状高速を、びかびかのメンツやマウディが走り回っている。新築高層マンションの駐車場は、自家用車で満員。来るたびに、別の国かと思ってしまう。こんなに変化のめまぐるしい国とつき合っている、その変わらぬ本質を、歴史のなかに探ってみてみたい。井波律子著『故事成句でたどる楽しい中国史』は、伝説の黄帝から清朝のラストエンペラーまで、歴代王朝の興亡を、「五十歩、百歩」「異域同舟」といった言い回しを随所に織り込みながら、たど

ると、足もとをすくわれる。そんな教訓が、本書を讀めば、嫌でも頭に入る。「北方有佳人、絶世而独立……」。チャン・イーモウ監督の最新作「LOVE RS」で、主演のチャン・ツィイーが衰

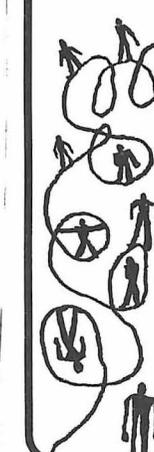
手を洗(wash one's hands of)と言えは、関係を断つという意味。イエスを死刑にしようとする群衆が騒いだので、総督ピラトが手を洗った。「この人の血に……責任がな」と言った故事にも「wash one's hands of」。金の子牛(golden calf)とは、愚かしく偶像崇拜の行為。ピラトと言えは、タビデが倒した巨人だ。聖書の翻訳をもとに、いまの英語が生まれた。ピラトの大統領をはじめ、キリスト教の信仰はアメリカの政治家に焼きついている。彼らの相手をすするの、宗教の知識は不可欠なのだ。



井波律子「著」『故事成句でたどる楽しい中国史』(岩波ジュニア新書・8109円)
石黒マリーローズ「著」『聖書でわかる英語表現』(岩波新書・7777円)
塩野七生「著」『ローマ人の物語』(8巻)『ユリウス・カエサル』(新潮文庫・4200円)

ポケットから

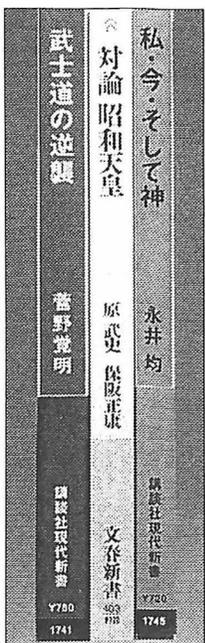
カジュアル読書



理科室の備品がなくなると、犯人は誰だという騒ぎになったとき、永井均さんはクラスみんなにこう言ったそうだ。「物は突然たど無くなる」というのもありうるのではないか。なんとも見上げた中学生である。以来うん十年、哲学者となった永井さんは、最近ますます哲学が面白くてたまらないという。『私・今・そして神』には、かなりへんてこで、どこか愉快で、なのにけつこう真面目な思索のあれこれがあるんだに詰まっている。たとえば、この世界はいつさつき出来

たとする「五分前世界創造説」。世界は私の目の前で作られているとする「五十分先世界創造説」。そんな馬鹿なと言いたくなるが、そこから始まる自問自答のキャッチボールがいつの間にか、カ

が、その神にされてしまった人間がいたらどうなるのか。原武史さんと保阪正康さんの『対論 昭和天皇』は、全国一斉の万歳三唱や御製といった、これまであまり注目されてこなかった資料から、昭和天皇の実像に迫っている。天皇を神にまつりあげたのは軍人勅諭と教育勅語だが、その背後に大和魂と武士道のイデオロギーがあった。だが、菅野覚明さんの『武士道の逆襲』は、新渡戸稲造はじめ、明治になって唱えられた武士道はみな「セモノ」と言う。本物の武士道は、負け戦で大将が死ぬのは、額から縦に切りつけ、小便をかけ踏みつけて顔の皮を剥ぐといった、血みどろの作法だった。敵に首実検をさせないためだ。こんな武士道がどう変形して、国民道徳としての明治武士道が成立したのか、すつきり理解できて嬉しかった。



菅野覚明「著」『武士道の逆襲』(講談社現代新書・7988円)
原武史、保阪正康「著」『対論 昭和天皇』(文春新書・7566円)
永井均「著」『私・今・そして神 開闢の哲学』(講談社現代新書・7566円)

橋爪大三郎さん(社会学者)の
ポケットから

成田もソウルの空港も、「ヨソ様!」と叫ぶ日本女性に占領された。二〇〇四年、空前の韓流ブームが爆発した。どうなっているの、韓国メディアはあきれ気味だ。でもこのブームは、とてもよいことなのではないかと私は思う。韓国ではずっと、日本の大衆文化は輸入禁止だった。解禁したら、とっとそちらが流れ込むのではと、びくびくしていた。ところが反対に、韓国文化が日本を圧倒。韓国側も余裕の表情である。

自伝的な映画『血と骨』の原作者、梁石日氏は『魂の流れゆく果て』で、大阪

の在日コリアン社会をセピア色に回想する。戦後すぐ、誰もが必死に生きていた濃密なコミュニティがそこにはあった。氏も事業に失敗して借金を抱え、東京へ出てタクシー運転手で食いつなぐ。

消えない過去をどう克服するか

暴力的な父は、悪名を馳せたあと北朝鮮へ渡り、母は病死、姉は自殺した。差別と貧困に苦しめられた数多の人生。表通りの戦後日本と背中あわせの、もうひとつの真実が、往時の記憶とともに甦る。

た。かつて失言で罷免された藤尾文相に對しても、なせば彼が韓日併合が「悪いこと」であったという前提で「よいこと」もした」式に論を展開したのか、私にはよくわからない」と批判する。悪いのは

過去の反日教育で、日本人の謝罪など必要ない。——こうまで言われると、ちょっと待ってと言いたくなる。

「大東亜共栄圏」と重なっているが、そんなことは気にしない。

過去を克服しようと、重い課題を背負って、年長世代は悩んできた。それを尻目に、差別や貧困を知らない世代がささくアジアを再発見する。豊かさや余裕が国と国のあいだの溝を埋めてゆき、東アジア共同体が語られるようになった。過去は正面突破でなく、こらやって克服されるものなのかもしれない。



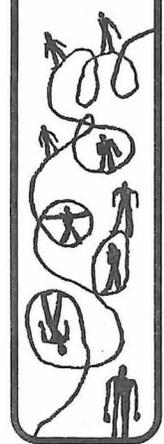
梁石日 [著] 魂の流れゆく果て (写真・裏表、光文社文庫・540円)
 金完燮 [著] 親日派のための弁明 (扶桑社文庫・840円)
 梁石日 [著] 「アジア」の世紀 (中公新書ラクレ・798円)

韓国の反日教育で、日本人の謝罪など必要ない。——こうまで言われると、ちょっと待ってと言いたくなる。

「大東亜共栄圏」と重なっているが、そんなことは気にしない。

過去を克服しようと、重い課題を背負って、年長世代は悩んできた。それを尻目に、差別や貧困を知らない世代がささくアジアを再発見する。豊かさや余裕が国と国のあいだの溝を埋めてゆき、東アジア共同体が語られるようになった。過去は正面突破でなく、こらやって克服されるものなのかもしれない。

カジュアル読書



25位

『テキストから遠く離れて』/加藤典洋著/講談社/1890円
 ●推薦者(橋爪大三郎/東京工業大学教授(社会学))

おまけ・「2004年夏休みに贈るベスト経済書100冊」『週刊東洋経済』第5909号
 p130,132,133 2004.8.14 発行

- 45位 『自由の平等』 立岩真也著 岩波書店/3,255円 (橋爪大三郎/東京工業大学教授(社会学))
- 72位 『よみがえれ、哲学』 竹田青嗣、西研著 NHKブックス/1,176円 (橋爪大三郎/東京工業大学教授(社会学))

おまけ・「2004年経済・経営書ベスト100」『週刊東洋経済』第5931号 p125 2004.12.18 発行

- 81位 人間の自由の条件—ヘーゲルとポストモダン思想— 竹田青嗣著 講談社/2835円 (橋爪大三郎/東京工業大学教授(社会学))

おまけ・「いい大学 先生で選ぶ理系文系100選」『AERA』第17巻5号通巻847号 P37 朝日新聞社 2004.2.2 発行

文系50人

研究者名	得点
橋爪大三郎	26.5

東京工業大学
 82.2%(222点 270満点) 62.5!
 キリスト教、仏教、イスラム教、儒教などの論理構造と本質を解明。教育政策にも発言。著書「日本人は宗教と戦争をどう考えるか」

【大学ランキング2004年版】(朝日新聞社)の「メディアへの発信度(総合)」を基に作成した。ただし、①理系、芸術系の研究者②学部生を担当しない大学院・研究所専任の研究者③大学以外への転出予定などがある研究者や故人などは除いた。点数は02年に①主要紙書評欄で著書が紹介された回数②各紙文化欄や雑誌に載った論文数③各種新書・選書の執筆冊数——などを、一定基準に従ってポイントに換算して算出した。研究者の正式所属は大学院の場合がある。表では、判断する限りで主に講義を受け持つ学部・学科を表示した。入試データについては、理系の表を参照。